馬琴の鳥研究(1)『八犬伝』と鳥

鈴木　道男

1. 序　愛鳥家曲亭馬琴
2.『八犬伝』における鳥の扱いについて
3.『八犬伝』にみる本草家馬琴
4.『禽鏡』研究に向けて

1. 序　愛鳥家曲亭馬琴

本稿では『南総里見八犬伝』に登場する鳥について、馬琴本人を常に視野に収めつつ、特に馬琴活躍の当時隆盛を極めていた江戸博物学(本草学的博物学)に関する種々の論点から分析を加える。もとより、重要な「登場動物」の意味づけに関するこうした作業は、『八犬伝』の解釈のためには今なお必要であろう。しかし鳥の分析が、たとえば隠れた富士信仰を炙り出す（信多2004参照）といった明確な像を結ぶ可能性がないことは、もとより明らかである。本論は『八犬伝』を読み解くためにこれを行うのではなく、むしろ『八犬伝』を材料の一つとし、江戸鳥学、ひいては江戸博物学における馬琴の位置を確認しようとする作業の一環である。鳥に関しては、馬琴の時代に業績数のピークを迎えていた江戸博物学においても、精緻な学術的著作が多く、またそれに関わった人々の裾野の広さも次第に明らかになってきているのだが、その一端を担った一人であった馬琴自身の鳥研究の様相については、いまだに詳細の多くが明らかにされていないのである。

鳥を探して『八犬伝』を読み直すと、登場する鳥たちは、本文においても挿絵においても、多くは端役であり、鳥そのものに焦点が絞られる場合がさほど多くはないことはすぐに了解できる。しかし同時に、『八犬伝』世界にちりばめられている鳥が実に無数であることに改めて驚かされるのである。そして『八犬伝』に数多飛び回る鳥たちは、物語の進行とその隠された意味の暗示のために決して浅からぬ意味を持たされていることも少なくない。

七歳にしてすでに「鶯のはつねに眠る座頭かな」と詠んだと伝えられる馬琴の生涯は、常に飼育をはじめ何らかの形で鳥との接点を持っていた。思えば、馬琴が読本の作者としての地位を確立するに至った文化四年（1807）の半紙本の読本『月氷奇縁』は、舶来の「錦雞」の卵の紛失の罪を着せられて殺された腰元の恨みに始まる因果応報の物語であった。真山青果が『吾仏乃記』を引いて纏めたとおり、「元来、滝沢家は代々小禽ずきの家で. . . 馬琴の祖父左仲は浪人後鶯など養って娯んでいるようだし、父興義の死亡の際には、鶯、駒鳥、画眉鳥などの籠禽が六、七羽もあり、ほかに鶏もあまた飼育していたというから、それらの趣味が馬琴に遺伝されたものと見える。『八犬伝』の第八輯か九輯の奥附に、馬琴は諸鳥飼養法の広告を出し[1]、薩摩老侯栄翁の諮問を受けている」（真山1935 p.166）ほどなのである。68歳の年

[1] 筆者はかねてから『八犬伝』の種々の版に当たって探しているが、かかる広告を見出すには至っていない。馬琴の養禽書といえば黄表紙『養得筋名鳥図会（かひえたりにはこめいてうづゑ）』（享和二年）しか思い当たらない。京都烏丸の名鳥屋づゑ蔵が自ら飼育する珍鳥を紹介するという形で、「昼とんび」などを鳥にかけて滑稽に解説してゆく。清田啓子の翻刻（1989）参照。これが数十年を経て復刊されるとは考えにくいのだが。

には『禽鏡』と題した鳥類図譜も著している。これについては、本稿の考察を踏まえて、『玄同放言』や『兎園小説』の馬琴担当分、『燕石雑志』など、本草的記事を豊富に含む随筆を視野に収めつつ、次稿において詳述する予定である。ただし、馬琴の日記などから鳥に関する記事を拾う作業、馬琴の実生活における鳥の飼育の調査に関しては、すでに先鞭がつけられている[2]ので、さしあたり本稿では深くは立ち入らないこととする。

馬琴の鳥の飼育には、単なる趣味の域を超えた、とくにある時期には鬼気迫ると思われるほど異常に熱を帯びたものがあった。百を超える鳴禽の声の中で、落ち着いて創作に耽ることができるわけがない。この点では、やはり青果が『随筆滝沢馬琴』によって始めて世に紹介したと思われる『无益の記』[3]の序文は極めて興味深い。

> 甲戌の春、余に小恙あり。夏に至て尤溜飲に苦しむ。しかれども市中、尺地の逍遥するに由なし。おもへらく、もし試に小鳥を養はゞ、日々に運動して気を養ひ、生を養ふべし。因て五月に至てはじめてこの戯をなせり。しかるに余が性、物に泥り、正に諸鳥を獲て、毛色啼音餌養の事、つばらにこれを極めんとする程に、覚えずその数百数鳥に及べり。その事未だ尽さずしてこゝろ忽に倦き、病痾全く癒ずして、嚢中既に空し。こゝに再びおもへらく是俗翁児戯の態何ぞこゝらに小心して、徒に日を費すべき。則その鳥を放下して、復び養はず、録して以てみずから警む。大約養鳥（オヨソカヒトリ）の楽みは、財を費し業に怠て、亦絶て益ある事なし、譬ば登楼賭博に異ならず。故にわが非を飾ることなく、ふかく児孫を箴むるもの也
>
> 乙亥季秋　　解しるす

これによれば、「文化十年癸酉の夏の比、紅鶯[4]一隻を求得て、其籠を書斎の窓に掛けたりしに、終日よく鳴けば、聊保養にならざるにあらず」と飼鳥の開始を記した『吾仏乃記』の記述からは1年弱の遅れがあるものの、概ねこの頃、「百数鳥」に及ぶ多数の鳥の飼育が始まったと見てよいだろう。『无益の記』は、この1丁分にあたる序文の後、19丁にわたって購入した鳥の種と飼育に要した出費及び日付を書き

2　後述細川博昭『大江戸飼い鳥草紙』(2006) がこれを行っている。

3　青果は『無益の記』と記してこの序文を引用している。青果は序文のみ全文を掲げているが、いずれの写本に依拠したものか、早稲田大学図書館蔵の自筆稿本（文化12年、1815）と比較すると小異がある。よって本稿ではこの自筆稿本に従い、馬琴自身の朱を参考に句読点を入れた。ルビは馬琴自身による。

4　紅鶯（テリウソ）はウソ *Pyrrhula pyrrhula* のカムチャツカで繁殖する亜種 *P. p. cassinii* である。雄の腹が灰色の通常のウソ *P. p. griseiventris* とは異なり、雄の頬から下の下面全体が濃い朱鷺色で美しい。日本では稀な冬鳥である。馬琴当時も珍鳥であったと思われる。ウソはユーラシアに広く分布し、鷹司（1924）によればヨーロッパでは古来歌の一節を教え込むなどしていた（p.93）。江戸時代までの我が国では、これは行われていなかったようである。

連ねたものである[5]。この文化11年（1814）は『八犬伝』初輯が世に出た年でもある。一方、乙亥は文化十二年（1815）にあたり、異常な養禽熱は短期間のうちに冷めたことが分かる。ただし、日記や『吾仏乃記』から、その後もカナリア等は飼育を継続したことも分かっている[6]。結局馬琴は、『八犬伝』の大半を、諸鳥に囲まれた環境の中で著したのではなかったのだが、日記その他からしても、馬琴と鳥との縁は切れなかったことは分かる。馬琴の後の世に、これほどの鳥好きを我が国の文壇に求めれば、内田百閒[7]の登場を待たなければならない。ちなみに馬琴は百数鳥を「放下」することができたが、「小鳥を飼う者は阿房にきまっているので、そうでない人でも少し鳥に夢中になると、矢っ張り阿房の仲間に這入って来るらしい」と嘯く百閒は、「小鳥をふやしたりへらしたりして飼」い続け、鳥飼を止めることを諦めた[8]。馬琴も、青年期の不安定な一時期以外では全ての鳥を手放し、鳥を1羽も飼育しない時期はむしろ少ないようである[9]。

2.『八犬伝』における鳥の扱いについて

1）挿図を中心とする、諸動物の中における鳥の扱い

『八犬伝』の挿絵や口絵、表紙や目次などの付図に数多く登場する動物たち――それにはセミやトンボ、ガのような昆虫まで含まれる――の中でも、我が国で十二支のそれぞれに配されているネズミ、ウシその他の動物の全ては、何らかの形で登場させられている[10]。もしも馬琴が文献を明かしながら、得意の名物学的考証をさらに鏤める形で『八犬伝』を著して行ったならば、この作品は南方熊楠の『十二支考』と並べて論じられていたに違いない。もちろん、登場する動物たちは十二支に関わるものに限定されているわけではないが、これとて『十二支考』と同様である。ちなみに筆者は、博物を論じる際の熊楠の文章の展開と、博覧強記を誇示する際の馬琴のものとに強い類似性を感じている。熊楠は博覧強記の文

5　この時期馬琴が飼育していた鳥種の詳細はまだ詳らかにされたことがないので、『无益の記』に記された一覧表をここに引く。注記の位置の混乱や濁点の付し方等は原文のままとする。

　　○摺餌小鳥三十八種　○印はよめ鳥此分養らく

○杜鵑　○郭公　○鶯　○駒鳥　○小るり　大るり　ほゝ白　深山ほゝ白　深山かしら　黄ひたき　上ひたき　さめひたき　○小さめ　○目細　○黄せき鴒　眉白　尾長　○小から　○ひがら　○えなが　○四十から　○五十から　○菊いたゞき　野駒　みそさゝい　○小あかり　ひはり　○大よし切　○小よし切　のじこ　小けら　青けら　な（べ？）けり　黒つぐ　▲猩々鳴　目白　田ひはり　○せんにう

　　○粒餌二十一種　▲印水鳥也此分養らく

かなありや　文鳥　たんどく　十姉妹　金鳩　銀鳩　白子鳩　土鳩くり　ほゝ赤　うそ　をし鳥　ひえ　ましこ　ゐすか　あをち　くろち　山から　▲小かも　すゝめ　ちやぼ　うつら

6　日記から、例えば文政十年（1827）五月朔日や同十二年六月十五日にはカナリアの産卵や落鳥の記事があり、継続的に飼育していた様子が窺える。

7　百閒は生涯にわたって、いかに手元が不如意な苦境にあっても、養鳥をやめなかった。彼が折々に書き綴った鳥のエセーは『阿呆の鳥飼』として纏められている（内田1993）。

8　内田（1993）所収「続阿房の鳥飼」（1936）

9　細川（2006）は『吾仏乃記』の分析から、滝沢家では鳥の放下の後も20年間カナリアを飼育していたとしている（p.25）

10　それを暗示するかのように挿入されているのが、第九輯第百四十一回、絵馬師竹林巽と虎のエピソード及び挿絵である。筆者は、馬琴が竹林巽にあえて「十二支」の絵馬を関連付けているところに『八犬伝』と十二支の動物世界を結ぶ意図を見るのである。

体と自信にあふれた呈示のスタイルにおいて、馬琴の直系の子孫というべきではないかと思わされることがある[11]。しかし本論を、これを論じる場とすることはできないので、まず『八犬伝』の主要「登場動物」である十二支の各動物の出現のあり方について概観してみよう。

挿絵に描かれることが少なく[12]、本文で言及されることがヒツジに次いで最も少ないのはネズミである。馬琴には怪鼠を描いた『頼豪阿闍梨怪鼠伝』（文化5年、10巻）なる著作もあり、北斎の挿絵が興味深く、かつ巻末に引用書目とその主要記事を掲載している点が、馬琴の本草に対する関心を探る上からもまことに興味深い。この作品で、馬琴は鼠を描ききってしまったと考えたものか、『八犬伝』ではネズミの影が薄い。本人はネズミを憎むこと甚だしかったともいわれる[13]。第八輯輯頭の悪僕媼内を描く図の賛に「人而獣性牝牡相憐野狐鼠怪屠戮可駢」とある。

ウシは、初輯巻之一第十二回、伏姫が出会う役行者の化身の神童が「黒き犢に尻を懸て」登場したのを皮切りに、付図にも4回登場するが、干支が交代するかのように、トラの絵が現われる第百四十一回以降には登場しなくなる。「八犬伝第七輯巻之五に付記す闘牛考併に小狗（ちぬ）の略説」には鈴木牧之原図の闘牛図があり、第百四十一回第一挿絵の「絵額」、第七十三回の暴牛、第九十回の牛鬼がその登場の全てである。

次にトラは竹林巽の挿話に始まり、第九輯下帙に集中して9回描かれている。口絵第六及び第七図、第九輯下帙之下甲号巻之二十六の絵額、第百四十三回の両挿絵、第百四十五回挿絵、第九輯下帙之下乙号口絵には一休とトラ、第百四十七回の妖虎、百四十九回の掛軸が印象的である。トラが筋の進行に深く関わる存在であることはいうまでもない。

ウサギについては、は第七輯頭の口絵第四図外枠に模様化されたウサギが多数いるほか、挿絵の内部には、第六十八回第一挿絵に獲物として1羽、第八十五回にウサギの置物、第百四十一回第一挿絵の「絵額」及び同回第二挿絵の絵額として登場する。

---

[11]　興味深いことに、熊楠は馬琴を僅かしか引用しようとしていない。『十二支考』には牧之の『北越雪譜』のみからでも数度引用されているにもかかわらず、である。「田原藤太竜宮入りの話」に3箇所『昔語質屋庫』から、「馬に関する民俗と伝説」に『兎園小説』から引いている程度で、いずれも批判的引用である。「馬琴の博物に関わる随筆には、展開、思考の様式が熊楠を思わせるものが多々あるように思われるが、これを厳密に熊楠と比較することは非常に大きな課題であろう。熊楠の書簡では時折馬琴に触れ、例えば土宣法竜宛明治36年（1903）6月7日付書簡には「西洋に近来アストロノミカル・ミソロジストなどいうて、古人の名などいろいろ釈義して天象等を人間が付会して人の伝とせしなどいうこと大いにやるなり。予今度一生一代の「燕石考」を出し、これを打ち破り、並びに嘲しやりし。･･･　左様のこと、なにか大斬新と心得る邦人もあるにや。実は天保ごろに馬琴がかきし『玄同放言』というものに、蛭子命は昼子なり、スサノオの尊は風スサムことなり、などと論じたのがある。･･･　人の誤りあばかんとして、ゆきすぎのあまりみずから過ちに陥ること多し」とある。「燕石考」はロンドンのNature誌に掲載すべく英文で1903年に著された論文'The Origin of the Swallow-Stone Myth'の日本語版であり、未発表に終わったため幻の論文といわれるもので、英文の数段階の原稿が残されている。熊楠の自信作であり、ここでことさらに馬琴が嘲笑されているのがむしろおもしろい。

[12]　注10に述べた絵額に見えるのみである。

[13]　真山青果（1935）は、馬琴のイヌ、ネコ、ネズミに限らない様々な動物嫌いを説き、馬琴も息子の宗伯も、それが「あまりに真剣すぎて気の毒にも見える」（p.164）ほどだという。馬琴の日記にもネズミに神経質になっている記述が散見される。しかし筆者は、それは鳥の飼育のためであって、鳥が蒙る被害をこそ恐れての振る舞いではなかったかと考えている。

タツは初輯第一回の第一挿絵に現われる白龍（これに関する里見義実の科白については3節で論じる）として、第三輯巻之四第二十八回の挿絵においては犬山道節が持つ刀からそれぞれ出現するほか、第九輯下帙巻之十三之十四（巻合併）第百十七回挿絵に登場する。第百二十五回挿絵中の衝立の絵としても現われる。

そのほかヘビは第九輯下帙之下甲号巻之二十六の絵額、第百二十四回の大蛇として登場しており、大道具としての地位も与えられているといえる。

挿絵に最も多く登場する動物は、ウマである。いずれも農耕馬ではない、武士の乗るものとして合戦の場面を中心に描かれ、合計57図に登場する。しかし『八犬伝』におけるウマはあくまでも騎馬であり、多くは戦闘のシーンに複数が描かれ、なんらの霊性も与えられることがない。「廓で誠」とされる「曲亭馬琴」の名にも含まれる馬であるが、ほとんどニュートラルな、乗り物に止まっていることに、むしろ何らかの意図を感じる。しかし、これに関して筆者は知るところがない。漢籍から採ったという「馬琴」はモンゴルの馬頭琴ではないかと詮索したものの、徒労に終わった。

ヒツジは登場回数も少なく、「八犬伝第七輯巻之五に付記す闘牛考併に小狗（ちぬ）の略説」以外、本文には登場しないが、第百四十一回第一挿絵は「絵額」を商う竹林巽の店の場面を描いており、扱われている絵額の中ににサルとヒツジ（尾部のみ）が見える。といっても、見えている尾部がヒツジのものであることは、この店が「十二支の絵額」を商っていることを前提として、消去法的にそのように推定できるのみである。

サルは第八輯下帙口絵第一図において、第八十八、八十九回の本文で筋の展開を促す、蟹目上が飼う小猿が描かれる。カニとサルのコントラストに妙味がある。

ニワトリは第四輯第三十四回の挿絵の中の立て札に描かれた絵としてひそやかに初登場し、第七輯頭の口絵と第九輯下帙之下甲号巻之二十六の絵額に現われる。また、第九輯（第一冊）の表紙は、各輯とも、模様化されたり、イヌの玩具や狛犬を描いたりしても、いずれもイヌのみが用いられるという『八犬伝』のそれまでの表紙の通例に反し、「淮南残丹鶏犬升天」と題して、一犬の背と手前にニワトリ2羽（雌雄）が描かれている。ただし、その出版年は天保6年乙未（1835）であり、酉年でも戌年でもない。表紙がが干支の連続を意図したものかどうかは不明である。「鶏犬升天」は諸橋大漢和に従えば「雞犬皆仙」ともいわれ、淮南王劉安が昇天に際して中庭に残した薬を舐めたニワトリとイヌが皆昇仙した故事であり、神仙伝劉安に見えるとのこと。丹はその薬である。ちなみに『八犬伝』第百八十回下編大団円挿絵「八犬仙山中遊戯図」においては、昇仙した八犬士と、八房及び與四郎と思われる2匹のイヌとともに描かれている鳥はタンチョウであって、ニワトリではない。

『八犬伝』においてイヌが重要であるのは当然であるが、表紙や、目次の模様絵以外の挿絵における登場回数は意外に少ない。神獣、霊獣として描かれる場合も含めて7図に登場するのみである。とはいえ、それらの図に与えられた、本文と密接に関連付けられた、示唆・暗示に富んだ描出の意味は極めて重い。

イノシシは第五十二回で小文吾の腕力を強調する「並四郎が短槍何ぞ小文吾が一拳に及ざるを知らん」

の場面と、第九輯下帙之下甲号巻之二十六第百四十一回の絵額のほか、第九輯下帙下套之中套頭の口絵、巻之三十九第百六十五回下の第二挿絵、巻之四十一第百六十八回第一挿絵「霊猪二たび神力を見す」に現われる。神意を受けたイノシシが戦術的に重要な働きをする火猪の大功の場面が中心である。

以上のように概観すると、『八犬伝』にはイヌ以外に、筋の展開を担う位置にあるものとして、ウシ、トラ、タツ、ヘビ（大蛇）、サル、イノシシが挿絵のなかにも大きく描かれて登場していることが確認できる。ウマは大役を担うことはないが、他を圧する登場回数が目立つ。逆に、ネズミ、ウサギの二つの小動物は活躍の場に乏しいことが分かる。ヒツジは、江戸時代には一般の目に触れることが少ない動物であったから、登場が少ないのが自然というべきかも知れない。

ニワトリは確かに日本では十二支を構成する動物の一つと認識されているが、この鳥に関しては、第九輯の表紙が、あたかも本文中にあまり扱われないことへの埋め合わせのように使われていることを除けば、やはり端役に留まっている。これらの主要な、ポピュラーな動物のほかに、図においても、本文においても、最も数多く登場するのはニワトリ以外の様々な鳥である[14]。それは種を示さない「鳥」としての登場以外に、鷲、雁、鷺などのように、現在の学名をふまえたサイエンティフィックな種名（標準和名）ではないものの、具体的な種を示してある場合も含めてのことである。鳥を含んだ図の総数は64ほどになり、その数は全挿図の6分の1ほどにまで及んでいる。登場する鳥はウソ（着物の柄の文字として登場[15]）、イエバト（ドバト）、ホトトギス（？）、スズメ、ガン（マガン）、ツバメ、カモ類、マガモ、サギ、モズ、ウ、タカ（クマタカか？）、ワシ、ツル（特にタンチョウ）、チドリ、フクロウ[16]、カラス、鳳凰[17]、トビ（？）など、多彩である。大きく描かれるのが常であるワシ以外は、図上小さな存在だが、水鳥のマガモなどは生物学的な種のレベルでもそれと識別しうるものが少なくない。

これらの鳥の多くは、挿絵においても本文においても風景の一部をなすものである。チドリ、スズメ、ツバメなどが特に背景を彩ることが多い鳥である。しかし鳥の機能は、当然これに尽きるものではない。馬琴は八犬伝の付図について、視覚を失う以前は全て自ら下絵を描いて版元に渡すほどの慎重さをもって具体的に指示しており、その重要性を認識していた。ここで、口絵に加えられた絵の外枠にいたるまで、物語の進行に示唆を与える、即ち予告・伏線・本文の補足等の機能を持つ重要なものを幾つか拾ってみよう。まず、肇輯巻之三第五回第二挿絵、「鈍平戸五郎便室に定包を撃」との賛がある図では、脚に書状

[14]　八犬伝の挿絵は、半丁１面を基本とするものと、見開き2面を用いたものがある。輯頭の口絵には、模様化された動植物や雲･波･宝尽くしなど、多様な枠が付される。それが絵を分かつのだが、人物の一部が異なった場面を描く隣の絵に、あるいは本文の一部にまではみ出すなどしていることがある。そこでは時空を異にするふたつの絵を関連付けることによって読者に独特の方法で伏線を張っていることが明らかである。こうした場合、両図は常に一体で論じるべきで、二分することに意味がないから本論ではその2図を一体として1図とカウントした。こうして数えた挿図の総数は382となる。

[15]　肇輯口絵第三図についての信多（2004）の議論参照（p.50 - 52）。やや強引な信多説においては、これが玉梓を「一言嘘神」とするための根拠となっている。但し、衣服の文字が鶯ではなく鷺であろうという点では、筆者は信多説を支持する。

[16]　目立たないのだが、第八輯上帙巻之二第七十六回挿図、庚申堂の木の夜の梢の根元にいる。

[17]　鳳凰は襖絵などに登場する。

を結わえられた鳥三羽が描かれている。これは義実が檄文を城に伝えるため捕獲したハトで、「東南のかたなる豆畑に、鴿夥求食あり。彼何処より聚ふと見れば、滝田の城より旦に来て、夕になれば還るかし。鳩は源家の氏の神、八幡宮の使者とぞいふなる。これによりて不意、些の術を獲たりしかば、則神に祈りつゝ、壮佼どもにこゝろ得さして、窃に羅して件の鳩、五六十を捕たり。かくて数通の檄文を書写め、件の鳩の足に結びて、放さばかならず城へ還らん」というわけである。この場面では『封神演義』九十五回が明瞭に意識されているという[18]。

第六輯輯頭口絵第二図では、外枠右上に富士山、上部雲、右に雁と思われる飛行中の水鳥4羽、下にハスのような水草が描かれる。外枠によって区切られた次の第三図は、まさにこの外枠、即ち左上にタカ3、雲、左下と下部にナスを多数描いた外枠によって第二図との密接な関連性を与えられる。いわゆる「一富士二鷹三なすび」が完成するからである[19]。

第七輯巻之四第六十九回第二図は「禽獣の怨灵は文外の画なり看者宜意をもて解べし」と謎をかけ、ワシ（イヌワシ？）、ガン、クマ、キツネ、タヌキ、シカ、キジなどが妖火とともに死に行く木工作を襲う場面を呈示する。おそらくはその銃猟、特に霊鷲を撃ったことに対する因果応報のつもりか。巻之六には、その解答であるかのように、見開き半丁2枚を用いて、浜路姫をさらう霊鷲が描かれている。「応仁の昔かたり三才の息女鷲に捕らるゝところ」と題した第七十二回の第一挿図である。

伏線、あるいは作品に膨らみを持たせる意味で鳥が用いられた例として、第九輯下帙之下乙号中套頭口絵第二図が興味深い。外枠は水面の波を模した模様、図には「赦書」を銜えたガン1羽、が「友はみなつばさをさめてねる小田にあたもる雁のひとりさかしき」という馬琴の自歌とともに描かれ、その下には武田左京亮信隆がいる。里見義成は敵方の信隆に赦免の文を与えるのだが、信隆がどのように振舞うかは、その段階では未知数であった。信隆は海戦の最中に密かに城に戻り、結局里見側と戦うことを避けた。ガンはその赦書を銜えて信隆に届けるように描かれているのだが、もちろん手紙を運ぶガンは、『漢書』蘇武伝の「雁の使い」の故事を読者に想起させる。この輯では、信隆とは別に、「素藤の逆徒」であったが、後に犬士側の間諜の役を果たすこととなる千代丸豊俊が登場している。この口絵には登場しないが、信隆とセットで扱われる豊俊のほうにむしろ、蘇武との関連が強い。その豊俊の存在を暗示する役割をこの口絵が担っているのだと考えられるのである。

上に引いた例はわずかだが、それのみでも、端役であるはずの鳥に、馬琴が意外に大きな役割を負わせていることもあることを示して余りあろう。たとえば単に登場回数が多いだけであるウマとの差異は明らかで、それだけに、こうした機能を鳥に持たせうるほどに、馬琴が当時の鳥を始めとする動物に関する文献に精通していたことを確認できるのである。

---

18 服部（1990）参照。

19 信多（2004）p.136参照。信多説ではこのことが富士と『八犬伝』を結ぶ重要なヒントとされる。

2)『八犬伝』文章中の鳥の扱い

『八犬伝』の文章において、鳥がまさに鏤められているというべきなのは、逐一例をあげることはせずとも一目瞭然だが、「短夜なれば墓なくて、鶏鳴暁を告げる比」（第一回）のような鳥を用いた時刻や季節、空間の表現、「十騎に足らぬ残兵を、鶴翼に備えつゝ」（第一回）のような慣用句が多用されるなど、物語の進行に殆ど関与しない背景描写に使用される鳥が多いこと、鳥に関する和漢の古典の引用、上述の「鳩は源家の氏の神、八幡宮の使者とぞいふなる」（第五回）のような故事や格言、民俗またはそれを踏まえた表現もまた多い――これらの細部にわたって、漢文世界における並々ならぬ馬琴の力量を推し量ることができるのも、言うまでもない――こと、それに加えて、『八犬伝』には鳥の名を帯びた登場人物がみられることに、『八犬伝』のなかに頻繁に鳥が見出される要因を求めることができよう。ちなみに名前に鳥を含むのは第六輯に登場する鵙平以降、鵞禅坊、但鳥跖六業因、野幕沙雁太、野見鳥真名五郎梭条、水禽隼四郎緑林、潤鵞手古内ほどであろう。勧善懲悪の意味での善悪に分かれるが、いずれも端役というべき存在である。これらに馬琴のいわゆる「名詮自性」を適用してみると、鳥を含んだ名の大半は、巫山戯た当て字であって、従ってその程度の名をもつ人物の重要性は大きくはないことになろうか。鳥に関する和漢の古典からの故事格言、民俗の引用については、文学歴史などと幅広い接点を保持していた江戸博物学との関連において、次章で検討する。

ここでやや目先を変えて、鳥を使った珍しい表現の例を挙げて本節を閉じたい。

第九輯巻之二十一第百三十一回に鳥尽しの表現[20]がある。めでたさの表出に用いられる鳥尽くしの例にたがわず、妙真が勢ぞろいした八犬士を、音音・曳手・単節らとともに宿所に迎える準備の喜びの場面で、「... 幇助多かる火焼鳥（ヒタキ）、搨る擂盆のみそさゞゐ（ミソサザイ）、現鶯（ウグイス）は刷匙（セッカ）の、異名篩の目細鳥（メボソムシクイ）、目白（メジロ）圧瓜、早漬の、茄子の小瑠璃（コルリ）、青鵐（アオジ）の醆口に、掻くや辛のきく戴（キクイタダキ）は、籠に買れし鶏冠（ニワトリを示唆）海苔、萌生の豆鳥（イカル）、筍の、皮をむく鳥（ムクドリ）、鰭津物...〔(　) 内に各鳥の標準和名を付した。〕」と続けられるのである。慶意の表現としての鳥尽くしの常道を見ることができる。そして「六稔ふりにし月日星（イカルまたはサンコウチョウ[21]）、今再会の折を得て」涙に咽ぶ妙真に対して、「慰めかねし小文吾･親兵衛、嘆きは同じ亡親の、ありし世偲ぶ、簷下の松の、梢瞻仰て愀然と、又いふよしもなかりける。心汲知る信乃･現八、自余の四犬士共侶に、今は世になき家尊家母、又亡妻の事さへに、懐ふ犬塚･犬村里の、旧巣遥けく八百日ゆく、越路にあらぬ浜ちどり、迹は都に疎かりし、鄙の雛衣、名を紀なる、心々

[20] こうしたものは祝いの席の座興に、なかば戯れ歌として和歌で表現されることが多く、古典として残されるものは意外に少ない。江戸時代最大の鳥類図鑑『観文禽譜』を制作した幕府の若年寄堀田正敦（1755 - 1832）の歌集『水月詠藻』巻三の「物名」には、「鳥名十一」と題して、鷺、鴉（カイツブリ）、目白、鴫、鶸、鴒（シメ）、鵙、鵜、雁、鶴、鴨を詠み込んだ

咲にほふむめ白妙に散しきし日はひめもすにうかりつるかも（下線筆者。他に「あふむ」と「きじ」も現れる。）が収録されている。鳥を愛するものならではの、同じ「心汲知る」ことができる。

馬琴のものでは、言葉遊びとしては切れ味に欠けるものの、『養得筍名鳥図会』の冒頭が鳥尽くしになっている。

[21] 現在、ツキヒホシと鳴く鳥といえば、標準和名をサンコウチョウ（三光鳥）とするカササギビタキ科の鳥だが、江戸時代にはイカルにこの名が与えられることも少なくなかった。堀田（2006）p .540参照。

の哀情、人異にして憾は似たる、憂には何か勝間田の、池の鴛鴦（オシドリ），夜の鶴（ツル），子を先だてゝ老を鳴く、雌雄の中なる孀婦鳥、翅しほれて立まく惜き」（下線筆者）と、鳥を連想させる言葉を連ねてゆく。そして古の奈良の勝間田の池を示して文学的に想起すべき道筋を示しながら、単なる喜びにのみには収斂されない複雑な感情の吐露を戯れ言歌のうちに表現する。この鳥尽くしに対する「返し」の部分の表現は他に類例を見ない馬琴独特の境地であるように思われる。鳥尽くしのようなものは、鳥に異常な関心を寄せていた人間にしか作成し得なかったし、作成すべき動機も見当たらないだろう。注20に述べたように、同時代の堀田正敦がこうした試みをしているのだが、それは偶然ではない。鳥に対する博物学的関心の一つの発露と見るべきものである。当時の我が国の博物学は、あらゆる学、あらゆる学芸との結びつきを拒まない、開かれた学であったと見ることができる。その文学的表現なのである。

次章で見るように、馬琴は本草学的考察においても、あるいは文学的、あるいは人類学的考察においても、名物学すなわち物の名と物自体の関係の詮索に関わる考証に走ってそこに長く留まり、またその際に牽強附会に陥ることが少なくない。次章で見る「まみ穴」の議論がその好例である。次節の冒頭などでも論じるが、馬琴は、本草に関わる論考の中核となる思考法にも名詮自性を置き続けた人であって、同時代からそれが批判され続けているところでもある[22]。なお、次節以降でも、『八犬伝』本文中に登場する鳥に対する考察は継続する。

3.『八犬伝』にみる本草家馬琴

ここでもまず『八犬伝』中の例を引くことから始める。第八輯巻之七第八十八回、犬山道節がはじめて、放下師に身を窶した犬坂毛野に対面する場面である。人相を観て説きつつ黒子を抜く薬を嚮ぐ毛野に対して、道節は荀子を引き、「形相は悪といへども、而心術善なれば、君子たるに害はな」いのだが、「節相家の取捨する所、竜形、虎鶴形、獅形、孔雀形、鵲形、牛形、猴形、豹形、象形、鳳形、鴛鴦、鷺鷥、駱駝、黄鸝[23]、練雀[24]等の形に似たるを、富貴の相とし、猪形、狗形、羊形、馬形、鹿形、鴉形、鼠形、狐形、狸形の如きを、凶暴貧薄、夭折の相とす。夫人は万物の霊にして、これより貴きはなし。竜・虎、鳳凰、獅子、孔雀は、皆是禽獣にして、人に及ばず。人の身これに似たりといふとも、焉ぞ吉兆あらん。」と「詞せわしく説破」る。

この説は、道節が毛野の「才学を試」みるための反証であり、結局は道節が「某們が及ぶ所」ではないと述べる、毛野の「思ふに倍たる弁論奇才」によって反駁される。曰く、「御論は寔に然ることあり。然

[22] 例えば注30に引いた藍亭青蘭の、「いにしへは俳と誹と通ぜしものなるべしといへる、馬琴翁の説はわろし」参照。本稿では詳しく立ち入ることができないが、青蘭による『俳諧歳時記』の改訂の際、収録項目は増えたものの、馬琴の名詮自性によるこじ付けがましい語の解釈は多く切り捨てられている。また例えば注11に引いた南方熊楠の書簡参照。

[23] 我が国では稀なコウライウグイスを指す。

[24] これは今日のヒレンジャクやキレンジャクではなく、カラスに近い仲間のサンジャク類を指す。ちなみにヒレンジャクの古典的な中国名は十二黄、ヒレンジャクは十二紅である。注1で言及した『養得筍名鳥図会』を見る限り、馬琴は連雀を今日のレンジャク科の鳥と誤解しているようである。

けれども、五尺の身に、一分の鋭芽の入るときは、苛々として堪がたし。倘抜ずして日を経るときは、遂に患を做すことあり。面部の黒子もこれに同じ。」そうして「抑風鑑の一術は、孔子の教になきをもて、一方に偏る学者は、荀子の非相を甘じて、信ざるがいと多かれども、」観相学は有用であることを説くのである。

「名詮自性」は『八犬伝』中でも頻繁に用いられるキーワードの一つだが、道節の説の部分否定によってここでやんわりと認められているのは、いわば「形詮自性」なのかもしれない。ただしファジーな認容を得ているに過ぎず、「形詮自性」の解釈に限って言えば宙に浮いたままである。道節が引く所では狗形は凶相だということになるが、八犬士の各人が犬に似ていると描写されることはない[25]。八房に乳を与えて育てたのは玉梓の怨念の使いであるタヌキであったが、これは『八犬伝』全体の災いの元であった。このタヌキとて、妙椿その他に化けるときは、動物としてのタヌキの面影は全く持ってはいない。ネズミやヒツジは僅かな登場の機会しか与えられていない。動物にちなんだ名を持つ登場人物は数知れないが、それらが動物に似ていると形容されることもないのである。『八犬伝』の筋の展開に際しては、人相に関する議論はそれほど大きな意味を持たないようである。この長台詞も、恐らくは馬琴の教養の披瀝として拝聴しておくべきものであろう。馬琴の文中では登場人物に仮託されているこのような議論は、現在ならば主に文化人類学の対象となるべきものであろう。しかし当時の（飽くまでも当時の）博物学からこれを見れば、その最も外側の領域として、やはりこの学問の中に包摂されるべき内容であるということができる。即ち、浩瀚さを誇る博物学の文献ならば、引用があって当然の内容なのである[26]。

こうした、当時の学問的コンテクストの中で、馬琴と本草学的博物学、特にその中の動物学分野との関係を測る上で、幾許かの随筆以外では『八犬伝』ほどの好個の資料はない。『八犬伝』の本文やその外のテクストにおいて、馬琴は時折、ことさらに本草に関する造詣の深さを披瀝する。まず、第七十回の直前に置かれている、「文政十年丁亥冬十一月大寒前六日　蓑笠老逸」と記された「第七輯巻之五に付記す闘牛考併に小狗（ちぬ）の略説」に着目してみよう。馬琴はここで「闘牛（うしはわせ）は、本邦にも、むかしより越後州古志郡、二十村に在り」として、「吾友鈴木牧之は、越後魚沼郡、塩沢の里長なり。いぬる辰年春三月二十五日、予が為にその地に赴きて、闘牛を観て、手づから図説を為りておこしたり」と述べ、牧之が描いた図をもとに渓斎英泉に縮図を作らせて掲載している。牧之は『北越雪譜』の著者

[25]　『八犬伝』各挿絵の人物の顔部分は、英泉や重信といった絵師ではなく、剞劂氏が担当しており、主要登場人物は、個性は出しながらも様式化された美男美女と醜男醜女に収斂させられている。第二輯口絵第二図に描かれる亀を背負ったガマは亀篠と大塚蟇六だが、この図のため、その後描かれる人物としての蟇六にヒキガエルを敷き写して見るよう誘導されるなど、若干の例外もある。

[26]　この意味で、『玄同放言』などの博物学的随筆は、ごく大まかに言って、医学・薬学を本業とする小野蘭山や栗本丹洲ら化政期の職業本草学者の業績よりも、堀田正敦のように諸学に目配りができた人々、すなわち屋代弘賢（馬琴主催の「兎園会」会員であった）ら書誌学者や博物大名たちの業績に通じるところが大きいというべきかも知れない。

として夙に有名だが、まだ無名であった当時から、馬琴とは気の置けない書簡のやり取りをもしていた。[27]

「略説」中、稲若水（とうじゃくすい）の『本草綱目別集』とされているのは稲生（いのう）若水の『結髦居別集』（4巻2冊）で、若水校和刻本『本草綱目』完成の年である正徳四年（1714）に、和刻本と同時に、同じく若水による『本草図翼』（4巻）とともに、いずれも同じ体裁と字体で刊行されている。『結髦居別集』植物21項目、動物8項目について、諸漢籍から抜粋抄録したものである。ちなみに『本草図翼』は『本草綱目』のために同じく漢籍から419項目について1～数図を集録したもので、『結髦居別集』とともに『本草綱目』の補完を目的としたものである。『結髦居別集』は若水校訂『本草綱目』に「新校正別集」一之二および同三之四の題簽を付して2冊で、『本草図翼』は『図経』と題した『本草綱目』付図集に「図翼」一之二および三之四として、同じ2冊で付属する形でも販売された。従って馬琴が用いた『本草綱目別集』なる表現は妥当である。また、「付記」の文末で、この付記を、「これらのよしを書つめて、好るものに示さばや、と思ひつゝ、さる暇のあることなければ、久しうして得果さゞりき。こはその崖略のみなれど、八犬伝の名にしをふ、小狗の事しも漏さじとて、暗記のまゝにしる」したとする馬琴の故意か否かは別として、『結髦居別集』巻四の「払菻狗」からの引用において、本来「馬鐙狗長四五寸」となるべきところが「馬鐙狗長四寸」となっている以外は正確である。「略説」の展開そのものも、本草の文献として見ても手堅いものである。

小狗（狆）に関する議論とともに、闘牛についても、牧之のもの以外で引用されているのはほとんどが漢籍であり、類書を用いたものとは思われるが、その対象は『酉陽雑俎』から府志県志の類まで多岐に亘っている。この広汎な漢籍からの引用のあり方は、『本草綱目』に源を発しながら、独自の名物学的考証をかさねて、結局薬効の議論を離れ、実質的には、記載の学である博物学への方向をとるに至った、江戸時代の本草学的博物学の基本的なあり方を踏襲したスタイルであるといえる[28]。江戸時代の我が国の本草学のスタイルの祖形となった『本草綱目』は、「釈名」によって対象物の名称の地域差と時代差を審らかにしてから、各項目の議論を始めるのである。本草家による江戸博物学の文献では、漢籍の引用の次に我が国の古典や地方の情報を加える形が通常である。

馬琴の本草について『八犬伝』からもう一例を引く。第八輯下帙巻第五付録（天保三年壬辰夏五月中浣　蓑笠漁隠識）には、「附録」と題してマミなど獣の談義が行われている。通常アナグマ、まれにタヌキの別名とされるマミに対して、馬琴は鼲鼠すなわちムササビではないかという説を立てる。「江戸麻

[27]　但し、岩波文庫版『北越雪譜』の益田勝実の解説がはじめて明らかにしたように、『北越雪譜』は当初牧之が自分をファーストオーサーにせず、「中央文人」に名をなさしめるに甘んじるまでへりくだって、「山東京伝述・北越鈴木牧之校之『北越雪談』」の形での出版が計画された。しかし出版費用の回収を危ぶんだ京伝が作業をためらったため、紆余曲折の末、文化十三年の京伝の没後、馬琴が校訂に当たることとなった。文政三年（1820）から馬琴は『玄同放言』に牧之稿を入れることとし、「闘牛考併に小狗（ちぬ）の略説」の付図はそのために牧之が作成したものにあたる。『玄同放言』文政三年版の第三巻奥付に「近刊」として「江戸著作堂主人著越後塩沢鈴木牧之考訂越後雪譜」の広告がある所以である。しかし馬琴の作業も遅々として進まず、さらには、馬琴は牧之に原稿を返すことすらしなかった。そのため、牧之が改めて執筆し、京伝の弟の山東京山刪定の形で天保六～十一年に世に出たのが『北越雪譜』なのであった。

[28]　こうした学問の流れについては鈴木（1996）参照。

布長坂のほとりなるまみ穴」という地名の由来に関して始まる議論であるから、引用文献は万葉和名鈔に始まり我が国の江戸時代の本草学的博物学の成果に属するもの――貝原益軒の『大和本草』、稲（稲生）若水校訂『本草綱目』、野必大『本朝食鑑』――に及ぶ。これらの本草書は、江戸博物学の優秀な典拠と目されるものである。ただ、馬琴はこれらにはない新説を立て、「江戸の地名を誌せしものに、かばかりの、考えだもなきは、遺憾の事ならずや」とまで述べるのだが、現代まで、ムササビをマミとする説を補強する傍証は見出しがたい。しかし同音あるいは類似の音をもって「～に通ずる」とする、馬琴作品の随所に見られる名物学的考証は強引な力技でありながらも用意はなかなか周到であり、大真面目なだけに読む者を愉しませることが多い。馬琴は「和名をマミといふ獣はなし」との独断から、『本草綱目』の「猯」をマミとする「益軒・若水の二老翁」が「訛によりて訛を伝ふ、世俗の称呼に従ふものか」と切り捨てる。しかし、実は地方名を列挙してあらゆる考証に備えることこそ当時の本草家の常というべきなのである。馬琴は「鎖国」の時代に、中国の動植物に関する情報の不足を克服し、我が国の山野に有用な動植物を求める努力の果てに成立した、文献に偏りがちな考証の学としての江戸博物学の限界を指摘していることになるが、馬琴もやはりその限界の内部に留まっているのである。

それでも、例えば『八犬伝』第九輯巻之三十三に里見義成の科白として述べられた「... 那秋毎に、小禽を捉る者を見よ。必ずこゝへ友鳥の、渡るべしとは予より、相定めたるにあらねども、媒鳥を出し措くときは、野の鳥早くその声を、聞きつゝ遥かに慕い来て、掛たる羽籠に黏ぬはなし。況戦場に蒞む者は是存亡の境なり」云々のような生きた観察は、馬琴が必ずしも書斎にひきこもった博物家の枠内にのみいるわけではないことを示しているようにも思われる。

馬琴の依拠文献に関してもう一例を検討する。第九輯巻之十二下第百十五回に鸚鵡（オウム）が重要な役割を果たす場面がある。

蜑崎十一郎照文のきわめて長い科白中、「昔唐山晋の時、張華が畜し白鸚鵡は、主人に悪夢の凶兆を、報て免るゝことを得たりといふ、事文後集に本文あり。又唐の天宝年間、長安なる豪民、柳崇義が妻劉氏は、隣舎児にて疎からぬ、李弇と密通したりしかば、俱に計りて崇義を殺して、涸井の中に埋めつゝ、知ず兒して訴けり。是により、検吏その家に来て、仔細を糾明しぬる折、崇義が畜ける鸚鵡あり、有司に向ひ声ふり立て、崇義を殺せし悪棍は、劉氏と李弇なりと云、その声分明なりければ、奸夫淫婦は免るゝ路なく、その罪立地に発覚れて、軈て刑戮せられけり。時の天子玄宗帝、件の鸚鵡を忠として賞て、封じて緑衣使者といふよし、載て天宝遺事にあり」云々として、自らが鸚鵡にことを告げられて、諌めに馳せ参じたことを述べる件である。浜路姫との関係を疑って、八犬士の一人犬江親兵衛を遠ざけた主君の里見義成を諌めようとする場面における発言の一部である。

江戸時代の本草学的博物学の文献においては、鸚鵡に関する記述の中で『開元天宝遺事』の抜粋を目にすることが多い。例をあげれば、馬琴が『禽鏡』（1834）制作に当たって最も多く引用している水戸藩

医佐藤成裕（勝成裕、1762-1848）の『飼籠鳥』[29]（文化五年1808自序、文政四年1821巌格序）が「鸚部」の「緑鸚鵡」の項に引いているほか、江戸時代を通じて最大の鳥学書である堀田正敦の『観文禽譜』（1832）も、「青いんこ」の項に『天宝遺事』の記事を引用している。一方、『事文後集』の張華の件は馬琴の慧眼が発見したものか、浩瀚な『観文禽譜』の引用書目にもなく、他の本草書でも眼にすることがない。

前述のように、こうした漢籍からの引用の羅列は、名物学を基点とする江戸の本草学的博物学とは切っても切れない営みである。本来、本草学は薬学であるが、馬琴の当時、化政期を中心に、薬効の有無に関わらず、広く自然物全体を記述しようとする博物学が、江戸を舞台に開花していた。これも本草家の守備範囲とされていたのであるから、馬琴に対する、（博物学的な意味での）本草に通じているという古くからの評価[30]は決して根拠のないものではない。耽奇会、兎園会に集う当代切ってのビブリオテーカーに伍してそのメンバーをリードしている事実はそれを証明する。次稿で扱うが、高松藩家老木村黙老は馬琴の鳥類図鑑『禽鏡』を購入しようとして骨を折っていた。ちなみに長子宗伯を医員として松前藩に仕官させることに成功した馬琴が、家業として「家伝神女湯」、「精製奇応丸」、「熊胆黒丸子」、「婦人つだ虫の妙薬」といった薬を販売していたこともよく知られている[31]。売薬を始めたのが馬琴自身であったことからしても、本来の薬学としての本草学にも一定の造詣があったことを認めうる。武人の科白の中に収めるにはやや無理があるように見える一節において、馬琴はやはり本草学への造詣の深さを誇示しているのである。ふり返れば、すでに肇輯第一回において、馬琴は里見義実の科白として、いわば竜の博物学を展開し、それを聞かされた家臣杉倉木曾介氏元に「和漢の書を引、古実を述、わがゆくすゑの事さへに、思量りし俊才英知に」深く感佩させていた。地の文はもとより、登場人物たちが深い学識を披露するのは『八犬伝』の特徴の一つである。

ここに前述の『大江戸飼い鳥草紙』（細川2006）から馬琴の本草に対する批判を引く。本書は馬琴の養鳥を軸に、江戸時代に流行した飼い鳥の諸相を解説した好著であり、馬琴の日記からの引用等の解釈等で裨益されるところが大きいが、馬琴の学問そのものの見方には、疑念を覚えざるを得ない。曰く、

> ... 馬琴を紹介する文章において、馬琴が本草学にもよく通じていたとする解説を読む事がある。

[29] 馬琴は筆耕に転写させて全巻を所有していた。最終巻末尾に朱で転写について述べ、左端に墨筆で「甲午天保5年（1834）春三月二十一日令謄写畢（おわんぬ）著作堂主人」と自筆で記している。（国会図書館蔵<京乙-344>）

[30] 薬学としての本草を次第にはなれ、自然物全般の命名記載としての博物学の性格を強くし、かつ歳時記や『訓蒙図彙』などの様々な絵入りの百科辞典を通じて大衆に消費されていた。この本草学的博物学がその大きな部分を占めるものとしてこの時代の本草学を見たとき、例えば藍亭青藍が『増補俳諧歳時記栞草』として馬琴の『俳諧歳時記』を増補改編した際の序で、青藍が後者に対して「草木鳥獣また其余の注釈全からざるもの多くして」云々と述べており、実際に青藍が後者掲載の季語2600余を3500弱に増やした部分の大半が動植物に関するものである。しかし逆説的に、馬琴の『歳時記』の「草木鳥獣」を中心とする季語の扱いと考証が優れていたからこそ、青藍は改訂を行ったということができる。筆者は『増補俳諧歳時記栞草』の存在そのものを「馬琴本草学」へのオマージュと見ている。同時に、青藍が序に続く「俳諧の字義」で「いにしへは俳と誹と通ぜしものなるべしといへる、馬琴翁の説はわろし」と述べるとき、賛意を禁じえない。注22参照。

[31] 品目に若干の異同はあるが、これらの薬の広告は、文化十三年の『八犬伝』第二輯の奥付に並んで付されてから、天保十一年の第九輯下帙下中編乙号上分巻にまで続いていた。売薬に関しては、例えば式亭三馬のような戯作者も薬店を家業とし、広告を著作に掲載していた。

『禽鏡』を残したことなどからそう説明されるのだろう。だが、日記や家記を熟読しても、馬琴が研究者という意識を持って本草学と向き合っていたとはあまり思えない。あくまで馬琴は戯作者であり、『禽鏡』の制作にしても、戯作者を創作活動に向かわせる心が少し違った方向に衝動を走らせた結果、世に生み出されたもののように思えてならない。(pp. 184 - 5)

馬琴が鳥に関心を持っていたのは確かである。だが、それはみずからの目で実際にさまざまな鳥を観察し、その実態を理解したいという類の興味ではなかった。鳥に関する他人の著作物を何冊か読み込むだけで満足するレベルの興味でしかなかったように思えてならないのだ。もっとも、人気の戯作者の立場では、何日も気ままに外を歩いて鳥を観察する時間など、どこにもなかったこともまた事実であるのだが。(p.185)

. . . 馬琴が『禽鏡』でやりたかったのは、あちこちに存在している優れた鳥の絵を集め、きれいに分類された一つの図譜にする、ということではなかったのだろうか。(p.185)

かかる批判に向き合う前に、上述の例から当時の学問の様相と馬琴の意図を把握しておきたい。その際、筆者の見解を概ね代弁するかのような馬琴論が、すでに昭和のはじめに著されていたことをここに示しておかなければならない。数ある馬琴の評伝の中で、本草と馬琴のかかわりを最もよく把握していたと思われるのは、既に何度も引いた真山青果の『随筆滝沢馬琴』(1935) である。青果は、よくも悪しくも本草学の伝統が医学に色濃く残っていた明治に近代医学の教育を受けており、本草の方面に明るかった。医者の目から、馬琴の「読書の範囲は、彼の職業上の必要から支那小説や和漢の史書を第一の愛読書としているが、医学癖は本草学や診療学にも多くの興味を持って、支那医学や日本の古方学にも研究を怠らず、終始愛読していたようである」(p.65) ことを観察し、「彼が幾多の随筆漫録を残して、異説珍聞の熱心なる採集者であったのは、文化文政の時代風潮の感染たるをいうまでもない。」(p.171) と述べる。江戸博物学の研究は、1980年代になってようやく研究が盛んになってきた分野である。青果の当時、まだ江戸博物学というタームはなかった。「鎖国」下の、抑圧的な状況にあって、やや奇矯な形をとりながらも、あらゆる自然物、自然現象に関する、興味本位ながらも飽くなき探求熱は、江戸博物学の原動力であったということができる。それを青果は正しく感じ取っていた。馬琴が校訂を手がけて果たさなかった鈴木牧之の『北越雪譜』などもこの「時代風潮」があって、はじめて認められた民俗学的かつ博物学的著作であったということができよう。

さらに青果は言う。馬琴が自らのそれまでの戯作と戯作者境涯を恥じて、『玄同放言』によって有益な書を世に送ろうとし、友すら遠ざけて書斎の人になったのは、まさに『无益の記』執筆の頃で、馬琴が「空虚なる文壇生活を遁れ、実用学に身を立てんとしたその転期に際会して、愛玩の小禽を放下しつくしてこの序文を書いているというのは、甚だ面白いことと思う。」(p.169) と。

馬琴が嗣子宗伯をして薬の製造販売を行わせ、宗伯の死後は嫁にその製造販売を継続させていたことで分かるように、こうしたことに必要な薬学も、馬琴の博識に源がありそうである。以上のみからでも、

『禽鏡』が「戯作者を創作活動に向かわせる心が少し違った方向に衝動を走らせた結果」作られたものでないことは明らかであろうし、『八犬伝』執筆と時を同じくして『玄同放言』など、いわば学問的著作に取り組んでいた馬琴の側面に、正しく光を当てる必要を痛感するのである。そこで細川の言を以下のように書き換え、拙稿のとりあえずの結尾としたい。

「馬琴を紹介する文章において、馬琴が本草学にもよく通じていたとする解説を読む事がある。『禽鏡』に限らず、馬琴には本草学を下敷きにした作品やエセーが多い。馬琴は、とくに『八犬伝』と『玄同放言』執筆の頃からは、研究者という意識を持って本草学と向き合っていたとすらいえる。馬琴は単なる戯作者として『八犬伝』を執筆したのではなく、そこには化政期の江戸の学問世界が凝縮されていたとすら言える。『禽鏡』の制作は、本草学的博物学の王道の上に構想されたものであって、戯作者を創作活動に向かわせる心が少し違った方向に衝動を走らせた結果、世に生み出された態のものではない。馬琴が鳥に関心を持っていたのは確かである。だが、それはみずからの目で実際にさまざまな鳥を観察し、その実態を理解したいという類の興味もさることながら、その経験をも生かし、本草の分野に貢献しようとしていたからでもある。鳥に関する他人の著作物を何冊か読み込むだけで満足するレベルの興味に留まるものでああありえなかった。馬琴が『禽鏡』でやりたかったのは、あちこちに存在している優れた鳥の絵を集め、きれいに分類された一つの図譜にする、ということでもあったが、それは本草学的博物学（江戸博物学）の営為そのものの一端でもあったのである。」

馬琴の博物学について、ここで補足しておくべきことが一つある。当時の博物学は、市井においても受容されていた。それは、歳時記を補強する必要があったためである[32]。17世紀末から18世紀初頭にかけての、日本のエンサイクロペディストたちの業績、『大和本草』、『訓蒙図彙』、『和漢三才図会』などは、詩歌俳句のためにも消費されていたのである。馬琴はこの分野にも一石を投じていた。注30で既に言及した『俳諧歳時記』（享和三年、1803）である。藍亭青藍の増補改訂を受けた『増補俳諧歳時記栞草』（嘉永四年、1851）が明治から現代までも版を重ねている。馬琴のものは、動植物の収録量が意外に少なかったが、「栞草」の方が、異名の収録を廃すなど、本草的、博物学的スタイルがやや削がれたものとなっている。ともあれ、江戸から明治にかけて圧倒的な権威となっていたこの歳時記によって、学問としての博物学と庶民の博物学をつなぐ扇の要にも馬琴がいたことになる。『俳諧歳時記』の内容の詳細にここで踏み込むことはできないが、『栞草』には2000年に岩波文庫版が出て、入手が容易になっており、その校注者堀切実氏の解説は完備している。

4.『禽鏡』研究に向けて

馬琴は、娘婿で絵をよくした宇都宮藩士渥美赫洲に鳥を描かせ、かつ諸鳥図から転写させ、自ら「著

[32] 『本草綱目』等、本草に関する中国の文献に対する名物学的考証が一応の完成をみた1700年ごろ、その成果は注30で述べたように、数々の絵入りの百科事典として結実し、それを大衆化する役割を果たしたのが歳時記ということができるのである。現在まで、その様相を最も詳細に記述しているのは西村三郎の『文明のなかの博物学』（1999）である。この書を挙げて、拙論の不備を補いたい。

作堂」の号で本文を著し、鳥類図譜『禽鏡』6軸311図のうちに約200の鳥を収録した。天保5年（1834）10月8日付けの自序がある。現在東洋文庫の岩崎文庫[五-F-2]の保管するところとなっている。収録項目などは菅原･柿澤（1993）が調査しており、折に触れて小規模な言及が見られないこともない。例えば磯野直秀（2002 p.569）は、『禽鏡』の注記に大名や幕臣などの消息が含まれていることを興味深いとし、記述の多くを佐藤成裕の『飼籠鳥』に拠っていることを明らかにしている。しかし渥見覚重という人物について、主要引用転記文献について、鳥図収集の人脈について、恐らくはそこに大きな働きをした幕府祐筆の屋代弘賢ら江戸のビブリオテーカーとの「兎園」集団における交流、その集団の江戸博物学における位置づけについて、また、なぜ若年寄の著作『観文禽譜』と同一の図譜が『禽鏡』に収録されているのかなど、未解明の問題が少なくない。そのなかの図が書籍の中に掲載されたのは、堀田正敦著、筆者編著の『江戸鳥類大図鑑』（2006）にタゲリの図を一枚借用したものだけかも知れない。本稿には、これらに取り組むために馬琴の本草に対する姿勢を整理するという意味合いがあった。本稿で確認できたのは、名称の由来を尋ねる際にやや独断に走る傾向があるものの、馬琴の本草学はその勘所、引くべき文献を正しく押さえた、オーソドックスなものであることである。これは『玄同放言』などの随筆においてさらに整理しつつ、『禽鏡』に向かうこととしたい。

文　献

【テクスト】

『八犬伝』のテクストは、挿絵に関しては主として昭和三年日本名著全集刊行会版（3巻）影印版、本文は主として小池藤五郎校訂の岩波文庫（1990年版）を用いた。後者は馬琴手沢本から原図を収録しているが、表紙や目次に付された図を欠く。馬琴のテクストは、著者名に滝沢解や他の名を用いず、すべて曲亭馬琴のもとに掲げる。

稲生若水校和刻（1714刊了）『本草綱目』附『結髦居別集』『本草図翼』東北大学狩野文庫蔵
内田百閒著・中村武志編（1993）『阿呆の鳥飼』福武文庫
曲亭馬琴（1802）『養得筋名鳥図会』、清田啓子（1989）駒澤短期大学研究紀要第十七号『翻刻　曲亭馬琴の黄表紙（九）』所収
曲亭馬琴（1803）『俳諧歳時記』、尾形仂ら編（1984）勉誠社『近世後期歳時記本文集成並びに総合索引』所収
曲亭馬琴編/藍亭青藍補/堀切実校注（2000）『増補俳諧歳時記栞草』（上、下）岩波文庫
曲亭馬琴（1805）『月氷奇縁』鈴木重三・徳田武編（1995）『馬琴中編読本集成』第二巻所収
曲亭馬琴（1815）『无益の記』早稲田大学図書館蔵自筆本
曲亭馬琴（1820-）『吾仏乃記』引用は八木書店版（1987）より
曲亭馬琴・洞富雄ら編集（1973）『馬琴日記』中央公論社
曲亭馬琴（文化5,1808刊）『頼豪阿闍梨怪鼠伝』早稲田大学図書館蔵
佐藤（勝）成裕（1808自序、1821巌格序）『飼籠鳥』東北大学狩野文庫蔵
鈴木牧之編撰『北越雪譜』岩波文庫
堀田正敦（1832）『観文禽譜』および『禽譜』宮城県図書館蔵
堀田正敦（1816松平定信序）『水月詠藻』静嘉堂文庫蔵

【引用参考文献】

磯野直秀（2002）『日本博物誌年表』平凡社
岡村敬二（1996）『江戸の蔵書家たち』、講談社
信多純一（2004）『里見八犬伝の世界』岩波書店
菅原浩･柿澤亮三（1993）『図説日本鳥名由来辞典』柏書房
鈴木道男（1996）「狩野文庫所蔵『本草綱目』の三版本とその周辺－江戸博物学の視点から－」東北大学附属図書館報『木這子』第20巻第4号所収
鷹司信輔（1924）『増訂改版飼ひ鳥』裳華房
高田衛（2005）『完本 八犬伝の世界』ちくま学芸文庫
高牧實（2003）『馬琴一家の江戸暮らし』中公新書1699
西村三郎（1999）『文明のなかの博物学』上下、紀伊国屋書店
服部仁（1990）「『八犬伝』典拠小考」『ことばとことのは』七集所収
細川博昭（2006）大江戸飼い鳥草紙、吉川弘文館
堀田正敦著･鈴木道男編著（2006）『江戸鳥類大図鑑』平凡社
真山青果（1935）『随筆滝沢馬琴』、引用は岩波文庫版（2000）による
南方熊楠（1903）'The Origin of the Swallow-stone Myth' 平凡社『南方熊楠全集』別巻1所収
南方熊楠（1903）土宣法竜宛明治36年6月7日付書簡　平凡社『南方熊楠全集』別巻2所収